

負担のない方法を用いることが必要だと学んだ。そして、家族病理や本人の特性等を専門的視点で理解をすることも必要であるが、本人の今できることや望んでいること等、本人自身が気づいていない自身のストレングスを、本人に代わってクローズアップし、支持していくことも支援者の役割のひとつだと感じた。日頃の業務において、本人が自身の力を信じられない状況の時でも、支援者がその方の力を絶対的に信じることで、これが支援関係に大きく影響するようになる。また、支援機関同士で支援計画を共有していく重要性も学んだ。現在まで、カンファレンスにて役割を確認し合い、その後それぞれの機関毎に支援計画を立案することはあった。共通認識を具体化し共有する所まで行くと、対象者に不安を与えないよりきめ細やかな支援がチームで行えると感じた。

■研修生レポート (18)

アウトリーチ支援において、ソーシャルワークの視点を持つことが大切であることを学んだ。

本人だけではなく、家族や周囲の関係性にも焦点を当てて、ケースマネジメントを考えていく必要がある。そのためには、各支援機関との連携や情報共有が欠かせない。ただ、各機関がそれぞれの支援の範囲(得意分野)を熟知していなければ、適切につながりすることは出来ない。互いの特徴を知り、信頼関係を構築していくことが今後の課題である。

最も印象に残ったのが、支援におけるストレングスの重要性である。視点をストレングスに変えることにより、当事者のエンパワメントに繋がる未来志向の支援になる。現場でもぜひ取り入れたい。

■研修生レポート (19)

「ソーシャルワーク」「アウトリーチ」が貧困世帯や、高齢、障害を持つ方への援助技術として発展してきた経緯を、理論的根拠のもとに学ぶことができた。私が日々行なっている支援が、社会の中でどのような役割を担っているのかを、全体像を通して知ることで、その重要性や責任を再認識することができた。また、講義を通して筆者自身が、医学モデルの視点が強いことに気付かされた。原因について考えることは、当事者への理解を深める上では有益ではあるが、それが必ずしも援助に直結するとは言えず、迅速で臨機応変な対応を求められる現場では、当事者の潜在的な可能性を信じる strengths 視点を、第一に持つことが必要である。それによって、関係性、支援方法、経過にも大きな影響があることを事例を通して気付かされた。

「ある現象は、人と環境との相互作用である」という視点を意識付け、日々の支援に取り入れていきたい。具体的には、ケースをアセスメントする際に見る視点到優先順位を付け、現在当事者ができていること、健康的な側面をまず評価する。2つ目は、当事者への家族内力動に注目し、当事者への話しかけ方や関わり方だけでなく、家族自身のケアや、家族同士の円滑なコミュニケーションも配慮する。最後に、関係機関と情報共有をし、役割の確認。アクションを起こす際には必ず連絡を取り合うなどの連携をしていく。以上の点を取り組む。

■研修生レポート (20)

○「ストレングス視点」

ご家族や当事者は長い葛藤や怒り罪悪感を抱え、当事者の中にある、回復し社会復帰できるかも知れないという希望は枯渇し感じられなくなる。

そんな絶望感を、払拭する事が出来るのは私たちが発信するメッセージだと感じた。ストレングス視点に関する事は、ケースによっては困難な場合もある事は経験してきた。しかし門田教授が言われた、「褒めるところがないのなら、あえて褒める機会を作る」というお話を実践しようと思う。弱さの視点が習慣づいているなら、ストレングスの視点での声かけを継続して行く事で、改善して行く事が可能だと感じた。

○「支援計画」

支援計画を立てる中で、各機関の役割分担を明確にし実践可能なスモールステップから成功体験を増やしたい。

その為には、顔が見える支援チームの編成、各機関の得意分野を 日頃から連携をとり信頼関係を築いておく事が必要。所属機関だけで対応できないという謙虚さを持ち続ける事は大切だと改めて感じた。

○「地域の関係機関・社会資源」

所属機関の特徴と、行政機関の専門性や説得力、さらに社会資源を熟知する事が必要。
また、足りない資源のあぶり出しや資源を作り出す事も大切だと学んだ。

○「まとめ」

私は更生保護という世界で働いているが、一般的な障がい福祉との違いにばかり目が行って
過ごしている事に気付いた。

何のサービスにも繋がることなく自身の施設にたどり着いた方々を、制度に繋げる事に躍起
になりご本人の傷んだ自尊心へのアプローチが後回しになっていた様にも思う。制度上、半年
と言う期間に縛られた支援しか提供出来ないのなら、繋いだ信頼からの継続した支援やフォロ
ーアップできるのではないかと思った。またそれぞれの機関の特色を活かし、所属している職
員の特色を活かす事で、もっと目の詰まったケースに合わせたカラフルなネットが張れる事
に、研修に参加している皆様に会えた事で実感できた。

講義・演習②・③「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ」

■研修生レポート（1）

「来ることを待つ」施設型の支援業務では対応しきれないものごとに対して、アウトリーチ
をどのような支援組織の体制を基に用いるのかを、学んだ。

また、アウトリーチに取り組むことで、当事者の表面的な状況は、訪問後の実際の状況から
かけ離れている部分があることも理解でき、特に高校生年代以降から国が取り組んでいる支援
は手薄になっているが、アウトリーチを用いた支援に取り組むことによって、当事者が就労に
就く割合は増加し、子ども・若者支援法の側面から見ても若者が就労に至ることへの支援とし
ても大きな役割を担っている。そこから、アウトリーチの必要性を感じた。

急激な社会変化とその背景要因の複雑化・深刻化がもたらす「施設型＝従来型」の支援には
限界があり、単一機関の支援では対応しきれない現状から、当事者の状況によって、様々
な機関が関わり・協働することにも取り組んでいる。当初は各機関の風習や文化があり、当事
者側に立った支援が困難であったが、「子どもたちのために」という谷口氏の呼びかけと①不
適応経験②きっかけ③配慮すべきこと④行動面も問題⑤支援経験⑥支援機関を利用するにあ
たっての困難⑦家庭環境⑧貧困という視点から、いかにチームで対応することの必要性に賛同
する機関が協働することによって改善されている。

アウトリーチを実行するにあたっては、入口段階で上手く結果に繋がっていなかったが、各
機関で共通の指標・谷口氏発案の Five Different Positions（対人関係、メンタル、ストレス、
思考、環境をそれぞれ5レベルに分けた各項目に対して、当事者の現在の状況を見る）を持っ
てケース会議等や実際の支援・評価を行うことによって、訪問前の事前準備・訪問に必要な当
事者の情報収集と訪問時の実際の関わり、当事者との関係づくりから、実際の訪問や継続的な
支援の後の出口段階である就労までに役立っている。

専門的な資格や経験を有するスタッフやボランティアが所属をしているが、当事者の状況に
よって必要な複数機関との繋がり、重層的な支援ネットワークを活用しながら、当事者には「対
人関係・コミュニケーションのトレーニング」や「歪められた認知の修正」「必要経験の補充」
「個々の状態に応じた中間的なトレーニング」を実施し、多面的なアプローチを当事者だけ
でなく、家族にも実施している。

「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチにおける実際の支援方法」

効果的な訪問支援を図るための事前準備

アウトリーチを行う際、その前の事前準備によって、訪問時における当事者への関わり、初期段階から出口段階、就労までのプロセスを考え、当事者はもとより、当事者の周囲に対しても協力を得る手段として、非常に重要な過程であることが分かった。

ここでは、実際の事前準備の仕方・方法について学んだ。

①事前準備の収集と分析：当事者を知る
一般的な情報相談情報（現状や経緯、主訴など）
障がいや精神疾患に係る情報（限界設定）
家族関係、支援経緯やその後の経過
好き嫌い、得意不得意、興味関心（具体的に）
回避事項（NGワード、やってはいけないこと）
生活実態（起床、就寝時間、習慣、行動など）
訪問支援に対する当事者の同意の有無

<留意点>

- ・情報を聞き取る過程で尋問と取られないようにすること
 - ・複数回に分けて面談し見立ての精度を上げること
 - ・支援対象となる若者の考え・価値観を理解する
- 導入段階では支援者の都合ではなく、若者の生活実態に合わせる
- ・対立構図・関係性を分析し、同じ轍を踏まないようにする
 - ・同意の取り方はできるだけ具体的なやりとりを押さえる

②支援者としての自己分析と環境確認：自分を知る
<自己分析>

周りの人が見る「自分」を知る。
自分の体験や得意・不得意分野の整理
事前情報に即した話題の確認
支援者個人としての関わりの限界
・範囲の設定
<環境確認>
訪問形態（目的・人数・支援方法）
訪問頻度・関与機関
家族や周囲関係者との連携
組織内や他機関によるバックアップ体制

<留意点>

- ・相手が受ける印象をも想定し関わる
- ・世代、経験、趣味、憧れ等を活用し効果的に関係性を構築する
- ・個人携帯やメルアドを教えるか否かでも関わり方は変わる
- ・支援過程で起こりえるリスクを想定し予め対策を打つ
- ・限られた人間関係の中での支援は依存を生み易い点に注意
- ・支援者が所属する組織によって支援できる内容・範囲は変わる

当事者にとって自分はどんな存在か、どんな印象を与えるかを考える。その上で、当事者の考えに変化を生むであろう過去の自分の体験・エピソードを掘り起こす。

ある支援者に偏った負担を防ぐ環境を作る。（24h体制になることを防ぐ。場合によっては、当事者にも「電話を貰っても取り次げない時がある」ことを伝えておく必要がある。）

③支援対象となる若者への「生きる」情報の提供

- ・支援者としての個人的な繋がりを意識
- ・必要性や興味・関心に繋がる情報
- ・侵襲的ではない安心感のある枠組みの提示
- ・訪問時どうすれば良いのかイメージ
- ・「一度だったら」と思ってもらうことから

<留意点>

- ・所属する支援機関の事前紹介だけでは抵抗感が増すリスクもある
 - ・支援経験や職業経験、年齢によっても働きかけは変わる
 - ・個人の状態に応じて導入の枠組み設定は変わる
 - ・必要に応じて手紙やE-mai、SNSでの働きかけも
 - ・提案がない限り初回面談は本人の部屋を避ける
 - ・事前の丁寧な働きかけがその後の関わり方の効果を高める
- （当事者個々の状況によってもその方法は一辺倒ではなく、一般的な働きかけでは上手く行かないケースへの対応についてもグループ討議を交えながら学んだ。）

「子どもが不登校や引き込もりに至った場合の保護者・関係者の初期対応の在り方」

①節度ある「受容」

誠意を持って受け止める(何かしら問題を抱えていることへの配慮)

極端な行動を避ける(ネットゲームに依存の場合、急にやめさせないこと。ネットから終わりのあるものへと徐々に移行していく)

適切な時に適切な方法で動き出す意識(美談や根性論に騙されない)

②積極的な待ちの姿勢 (初期対応では、保護者が早い展開を望む)

環境の中で解決できる問題と向き合う(ストレス要因をできるだけ減らす)

保護者・家族だけで抱え込まない(保護者のストレス発散・楽しみを探す)

本人が動き出すための事前準備(保護者の参画・保護者が可能な範囲で無理なくできる手段・頻度で、未だ引き込もっている状態だが、動き出した際に必要になるであろうことの情報収集を保護者にお願いする。)

③つながる・つなげる

関係者との信頼関係を構築する(対立構図に陥らないこと)

信頼できる専門家とつながる(具体的な対応方針と展望を共有すること)

必要に応じて他者につなげる(個人的なつながりを意識。コーディネーターとしての役割を重視)

「導入期～安定期」に必要なこと

①効果的な関係性の築き方

②支援ツールとしての勉強や遊び

③集団活動に向けた段階的移行

④生活場面や遊びの中に組み込んだ SST

⑤悪循環を断つための認知行動療法

⑥動き出すためのハードルを下げる

⑦安定期における保護者対応

「導入期の留意点・当事者との信頼関係の築き方」

・ワンダウンポジション：支援者として上から目線で考え、関わるのではなく、謙虚さを持って訪問・支援に入ること。

・謙虚・相手の側に立って考え、訪問する時間や話合う時間を考えること。

・何事にも当事者にとって無理強いしないこと。

・できるだけ YES・NO で答えられるような質問を準備すること。

・引きこもる権利を尊重すること。

・話し合いの中でかわした当事者との約束を守ること。

・手紙や交換ノート、E-Mail、電話での当事者との関係の発展性

・初回の訪問から事前情報とのズレを生かした、訪問の方法・時間等の修正

アウトリーチ＝当事者の生活空間に訪問できるという利点や事前の情報とのズレ＝本当の状態を知ることができる。

・当事者への支援と並行しながら、保護者への支援を行っていくこと。

・他機関との連携

・保護者への対応

・本人に会えなかった時の対応

「安定期の留意点」

・展開期や終結期、実際の就労を視野に入れた支援。

・FDP に基づいた家庭教師方式の学習支援。

・自宅から外への引き出し、様々な体験を促す。

「若者が抱える困難に多面的にアプローチする展開期」

①カウンセリングのみでの限界を知る

②依存や拘りの修正、価値観の転換(向いている方向からの修正を試みる)

③安定期からの流れを汲んだ慎重な働きかけ(失敗時のフォローを用意しておく)

④中間的トレーニングの提供(認知を変化させる体験をする。なんでもやるは✕)

- ⑤説得力を高める「シーディング」技法(話題の人物との関係性・前フリ)
- ⑥相談を受けた際の真摯な姿勢(誘導型のフリを用いた環境づくり)
- ⑦困難を共有した際の解決志向アプローチ(一般論で片付けない)
- ⑧問題改善に向けた支援ネットワークの活用(よりよい方法を選択する)
- ⑨つなぐためにはつながる(抵抗感への配慮、興味・関心・必要性)
- ⑩役割分担の中で行うリスクマネジメント(行動範囲が広がればリスクを生む)

「医療機関につながりたがらない当事者・保護者への受診に向けた誘導の在り方」

- ①疾患・障がいに対する誤解や偏見の解消
昔と現在では病院での対応は違うことを自ら情報収集し説明する(眼科→内科→心療内科と段階的に移行する中で解消する方法もある)
- ②第三者情報としての情報提供
病院の医師と合う・合わないがある。複数の病院の情報を提供し、選択は保護者がするように
- ③必要に応じた安定化・転院の援助(若者と医師の間に入って対立関係にならないよう支援する)
- ④要因改善・環境調整(投薬が全てを解決する訳ではない)
「見捨てられる」イメージを持たせず、医師に誘導した後も繋がり続けるメッセージを伝える

「教職員や学校教育機関との連携の留意点」

引き込みの若者と同じアプローチで過去の問題を聞き出し何に不満を持っているのか相手を知る。多忙な業務状況も配慮し、手続き等必要なことは支援者が行う。

教職員からのアンケートから以下の連携否定の理由があげられた。

既存の支援機関との連携経験に起因する不信任

委託事業の性質に関する不信

守秘義務や責任体制に対する不安からの抵抗感

「関係機関とのケース会議等連携の際の留意点」

協働は異文化を理解することから始まる。

また、各機関で当事者を見ている範囲が違うため、上手く支援に繋がっていない。

共通の評価指標・フォーマットを使用して、対処すべきことがらを決定する必要がある。

□各担当者が記録し提案すべき内容		□ケース会議で他の関係者も含め検討すべき内容	
対人面	傾向		
	留意点		
メンタル面	傾向		
	留意点		
ストレス面	傾向		
	留意点		
思考面	傾向		
	留意点		

<FDP: 共通指標 内容>

<対人関係>

- 1 対人恐怖を抱え、他者への警戒心、拒絶感が強く接触が全くできない状態
- 2 他者への警戒心、拒絶感が強い状態であるが、特定の人であれば接触ができる
- 3 個別での対人接触は可能だが、強い苦手意識がありコミュニケーションが不全である
- 4 小集団での対人接触が可能で、一定の枠組の下でコミュニケーションが可能である
- 5 小集団での対人接触が可能で、日常的なコミュニケーションをとることができる

<メンタル>

- 1 精神疾患を有する状態で重度の幻覚・妄想や自殺企画があり、自傷他害のリスクが高い
- 2 精神疾患を有する状態で、投薬等によって症状が抑えられているが自傷他害のリスクがある
- 3 精神疾患もしくは境界領域で、ある程度の自制が可能で条件次第で限定的に社会参加ができる

- 4 精神的に不安定であるものの、助言等で自制可能な状態で一般的な社会参加が可能である
- 5 精神的に安定しており、社会生活を営む上で支障はない

＜ストレス＞

- 1 ストレス耐性が脆弱で、些細なストレスでも心身に影響が生じるため、社会生活がおくれない
- 2 ストレス耐性が弱く、しばしば心身への影響が認められ、社会生活を営む上で困難がある
- 3 ストレス耐性は中程度で、一定のストレスが溜まることで時折、社会生活に支障が出ている
- 4 ストレス耐性が比較的強く、助言等があれば自制可能で、一般的な社会生活が送れる
- 5 ストレス耐性が強く、自制が可能で社会生活を営む上で支障はない

＜思考＞

- 1 全てにおいて悲観的・否定的な考え方で、客観的な意見を受け入れられず自制もできない
- 2 悲観的・否定的な思考で自制はできないが時として客観的な意見を受容することができる
- 3 悲観的・否定的な思考傾向にあるが、助言等を受け入れある程度自制が可能な状態にある
- 4 一般的な思考傾向にあり、助言等によって物事を合理的に考え、自制が可能な状態にある
- 5 一般的な思考傾向にあり、自ら物事を柔軟に捉えたり、合理的に考えることができる

＜環境＞

- 1 虐待やDV、不法行為等の深刻な問題が存在し、行政による緊急介入が必要な状態にある
- 2 家庭内暴力や家族間の対立等の問題が存在し、家族機能が著しく低下した状態にある
- 3 家族間の不和等の家族問題が存在し、家族機能が低下した状態にある
- 4 家族問題が存在するものの、家族機能がある程度保たれている
- 5 一般的な家庭環境で、家族機能が健全に保たれた状態にある
(Level 1～2 が一項目でもある場合、長期化・深刻化する危険性が高い)

＜他機関との協働を実現するために基本方針を共有するための分類＞

- ・ 綱登り型: 深刻な要因を持たない当事者 (FDP 1～2 がなく平均 4 以上)
- ・ らせん階段型: 背景要因が持つが複雑ではない (FDP 1～2 が少なく平均 3 以上)
- ・ スモールステップ型: 複雑で深刻な背景を持つ (FDP 1～2 が複数 平均 3 以下)

「引き込み状態から脱却した若者の学校復帰の際の留意点」

- ①無意識の意識化 欠席していたことの原因等、同級生からの問いに対する答えの準備
- ②モデリングによる認知の修正・動機づけ
復帰前に教職員から生徒間の話題等聞いておく
- ③段階的移行による安定化、定着への援助
逃げ場(座席の位置、保健室、相談室)や対処法(味方づくり)の確保
好きな先生、科目、短期間～通常期間へ

「引き込み状態から脱却した若者の職場復帰の際の留意点」

就労意欲を失った当事者が再び意欲を取り戻すために必要な配慮として厚生労働省による「労働者健康状況調査」によると、「職場における人間関係の問題」が最も不安や悩み、ストレスの原因であることが分かる。
当事者の特性も考慮しながら、職場の雰囲気・文化等々職場復帰する前に確認しておく必要がある。
復帰する前にアドバンテージをつくるために、工作上必要なことは事前にやってみる。

「関係性の再調整を行い支援者としての役割を終える終結期」

- ①本人の力を伸ばす
当事者のできることを増やし、支援者の関与度合いを減らす。
- ②家族関係の修復による安定化
距離感やコミュニケーション、約束事

③関係性の再調整

移行、離脱化、依存を生まない。

■研修生レポート（2）

訪問に対する事前準備の大切さを再確認することができた。自分は普段は日々の業務の忙しさでおろそかになりがちであったと振り返った。ご本人の支援のため、リスク軽減のために必要なことであるので、基本にきちんと立ち返るようにしたい。

また、谷口氏が実践されているような、豊かな発想を持った支援については、当初生来的とも言えるようなセンスを要するものであり、自分にはなかなか難しいのではないかと感じていたが、谷口氏もいろいろご苦労があつての現在であるというお話を伺い、試行錯誤し経験を積み重ね、コツをつかんでいくことで、もしかしたら自分も行えるようになるかもしれない、支援者としては力量を向上させていくため、努力していくべきことでもあると感じた。

谷口氏の講義においては、データや図表を用いた説明や、関わりの意図の明確な言語化などにより、法人の支援やその効果について、相手に説得力を持って伝えられていると感じた。現所属においても、自分たちが行っていることを職員間で共通理解しながら明確にしていくということが課題になっていると考えており、今回の講義を参考にさせていただきたいと感じた。

■研修生レポート（3）

特に事前の情報収集の重要性について学んだ。見立てるためだけでなく、相手や支援者自身を守るためにもなり、情報収集を行いながら、検討に必要な情報が十分に得られているかを確認する。学校や相談室で得られる情報は限られた時間や枠の中という限界から、実際には異なる場合があるため、留意しておく必要がある。また、本人の情報だけでなく、これまでに関わった支援機関の情報は、本人や家族の相談・支援イメージを知るためにも重要と感じた。

本人に関わる際の配慮については、本人が何を苦手と思うか、動き出す上でどんなものが障害となり得るかを事前に検討しておく、フォローを考えておく必要がある。個別対応のみでは、依存関係を生じやすいため、適切な時期に集団へと押し上げておく準備も必要なため、本人に合う方法での集団参加を検討しておくことが大切と思われる。

他機関との連携について。機関ごとに支援の限界があり、包括的に対応する必要がある。協力体制を整え、先を見据えて支援を行っていくことが必要である。

支援者自身について。相手から自分がどう受け取られやすいか、自身の得意・不得意について把握し、支援を行う際は常に留意しておく。支援者との相性もあることを忘れない。

■研修生レポート（4）

本講義では、アウトリーチを行う上で必要となる要素を、支援の段階別に、学ぶ機会となった。来所型の支援では「発見」できない困難層にアプローチできるのが訪問型であるとその意義を明確にされたのは、来所型に所属する私個人の支援活動の中で、改めて重要性を確認できたと考えている。

本講義のエッセンスは「事前の情報収集」と「アセスメント」に集約される。最初期の情報提供者からの得た情報から関係性の構築(趣味趣向をただ知るだけでなく自身も楽しむレベルまで知る)や精神疾患・発達障害等の可能性、本人と家族関係などの外部環境を把握する重要性を再確認できた。これは、支援を進める上で、当事者との関係構築だけでなく支援者のリスクマネジメント、外部機関との連携等幅広い支援計画を実施する上で必要不可欠な要素である。面談というクローズドな状況だけでなく、何気ない雑談や交流の中で当事者へのシーディングを行うスタイルも、認知行動療法そのベースに行われていることを知ることができた。

また、本人が支援の主体・中心であることを再確認する機会にもなった。関係構築の導入期から転換期、終結期まで一貫して行う。そのために家族支援や他機関との連携の重要性も再確認できた。

■研修生レポート（5）

当事者と関わる際の準備の大切さを学びました。情報を細かく収集し、本人と信頼関係を築くため興味関心のある分野について支援者自身がその分野を深く学んでいる様子や、本人との繋がりを絶ってしまわないために仕事などと言った NG ワードを知ることの必要性を学びまし

た。また、支援の中で家族の中に問題を抱える方がいたり、本人への対応に困惑されている方がいたり、家族支援抜きに問題の解決は困難であることを感じました。他機関との連携について本人が繋がることはもちろんだが、家族も病院など必要に応じて連携を取る必要があった。一つのケースであっても複雑に問題が絡み合っていることもあり、本人への対応だけでなく一つ一つの問題に丁寧に向き合っていくことの大切さを感じた。一か所の施設で長期的に支援することも必要だが、ニート・引きこもり支援について関わる際には問題に応じて様々な機関との連携が必要であった。

■研修生レポート（6）

アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチとして、従来型の支援を補うための専門的手段としてのアウトリーチ、そのノウハウを中核事業として自立に至るまでの総合的な支援事業を展開されている代表の講義は、二日間、大変凝縮された講義だった。

本人の興味関心・好き嫌いに至るまで、本人の価値観を含めた独自分析によるアセスメントは、谷口氏が「チャンネルを合わせる」と講義で挙げていたのは、非常に印象的であった。相談支援に最も重要な関係性を築くため、効果的な訪問導入を図るための事前準備に費やす時間、綿密な準備の重要性を見ることができた。どの講義でも共通して挙がっていた、本人と保護者は別対応で支援については、特に保護者は特効薬を求めると、最終目標をずらさず意識し、すこしずつ前進しながら築いてきた信頼関係を活かし伴走するように支援していく流れを見ることが悪循環に陥ることなく支援していく体制を学んだ。

依存は現実からの逃避だが、いきなり取り上げると不安や恐怖を助長するので、本人が動き出す時の為の事前準備、親を巻き込んでいくことで参画しているイメージ、本人と周りのバランスを見ながらの支援についてみる事ができた。

教職員や学校機関との連携については、日々の業務でも難しさを感じることはあるが、「連携」「協働」逆効果、負担増になり、どうやってアプローチしていくか？ここにアウトリーチしていくような感覚にもなった。

多面的アプローチにするためには、どこの地域でも個人では困難であり引きこもり支援に携わる者に求められる専門性、総合的な支援体制の確立等、課題はある。足りないもの、必要なものは「協働」で作らざるを得ない。簡単ではないが、今後も社会的に孤立・排除され孤独の中で苦しむ子ども、若者の存在がある限りは欠かせないものであることを痛感した。

■研修生レポート（7）

谷口先生には数々の現場での貴重なご体験から、このように問題解決のための内容を一つの理論体系としてまとめ構築してくださいましたことに心より感謝申し上げます。

教育や福祉の分野においても従来の支援のあり方に対して「これでいいのか」という視点から見直し、あいまいになっていた部分を指摘されています。私の中にある疑問、行き詰まりや課題が少しずつ解けてきています。

自分は支援者の一人として現場に携わり、試行錯誤を繰り返しながら模索してきた内容もありましたので、谷口先生の講義は本当に納得できるものでした。

当事者との関係性を築いていく時には「同じ高さ、同じ目線で、時には低くして」ということが本当に大切なことですが、支援者側には案外見過ごされてきていたのではないかと思います。谷口先生の支援はまずここから始まり、「相手の心をつかむ」ことで心を開きポツリポツリ話してくれるようになっていき、負ってしまった心の傷や閉じてしまった心をもう一度「この人だったら話してもいいかな」と本人が思えるようになれば、そこからようやく支援が始まります。

問題や原因探しに焦点を当てた従来型の支援のあり方に疑問を感じる事が多々ありました。まずはありのままの本人の現状を心から受け止めることが支援する上で大事であると思いました。発達障害や引きこもり者への見方は、社会的に低く見られたり弱い人たちとして考えられていますが、彼らの持っている能力を見つけ、人とは異なった能力をおかしいとせずの良い方向に伸ばし本人に促していくというやり方が人としての個性を重んじていくことにつながると思います。

誰にも起こりうることであり、いつでも起こりうることとしての社会的認識の重要性が示され、また具体的な改善策についても細部にわたり検討され、様々な課題への取り組みが紹介されており、これからの参考にさせていただきたく思います。ありがとうございました。

■研修生レポート（８）

当事者が来ることを待つ施設型対策ではなく、本来支援が必要な若者にアプローチするには、アウトリーチが必要。実施は段階（導入、標準、熟練）に応じて徹底した危機管理の下に関係性を重視した支援員（ナナメの関係性）の活用で対応するのが効果的である。フリースペースは自立に向けて個別プログラムへの参加を義務付ける。関係性の構築は、導入期、安定期、展開期、終結期で分類し、支援に当たっては、ゴールのイメージを大切にしつつ段階的に進める。とりあえずの訪問ではなく、事前準備を行って訪問することが重要。事前準備には、以下の情報収集と分析が大切

- 一般的な相談情報（現状、経緯、主訴等）
- 障害および精神疾患に係る情報（限界設定をする）
- 家族関係、支援経緯やその後の経過
- 好き嫌い、得意不得意、興味関心（具体的に）
- 回避事項（やってはいけないこと、避けるべきこと等）
- 生活実態（起床・就寝時間、習慣、行動等）
- 訪問支援に対する同意の有無
 - 安定期の支援における留意点は
- 効果的な関係性の築き方
- 支援ツールとしての勉強や遊び
- 集団活動に向けた「段階的移行」
- 生活場面や遊びの中心に組み込んだSST
- 悪循環を断つための「認知行動療法」
- 動き出すために「ハードル」を徐々に下げる
- 安定期における保護者対応展開期のアプローチ
- カウンセリングのみでの対応の「限界」を知る
- 依存やこだわりの修正、価値観の転換
- 安定期からの流れを汲んだ慎重な働きかけ
- 中間的なトレーニングメニューの提供
- 説得力を高めるシーディングの技法
- 相談を受けた際の真摯な姿勢
- 困難を共有した際の解決志向のアプローチ
- 問題の改善に向けた支援ネットワークの活用
- つなぐためにつながる
- 役割分担の中で行うリスクマネジメント
 - 終結期の対応
- 本人の力を伸ばす
- 家族関係の修復により安定化
- 関係性の再調整

■研修生レポート（９）

先生の経験した事例を通して、ご講義いただき、非常に勉強になりました。自分の抱えるケースのことを重ね合わせながらお聞きしました。

中でも強く印象に残ったことは、被支援困難者の支援をどのように考えていくかということです。所属機関の今後の課題であると感じました。極限の状態に追い込まれている子どもや若者、その家族からSSFに届くメールや電話から彼らの現状を思い知らされました。経済的な面や能力的に支援を求めることが困難であったり、これまでの体験から支援に対する拒否感だけが強くなっているということを目の当たりにしました。しかし、そのようなケースほど、問題の蓋然性が高く、切迫した状況にあると感じました。そのような人たちへ支援の方法としてアウトリーチという支援は非常に有効だと感じました。しかし、有効であると同時に、家族関係や本人との信頼関係を丁寧に扱い、戦略を持って実施しないと、リスクも高いと感じました。継続した支援を可能にするためには、支援者が、当事者のことを理解すること、そして支援するための仕組みを整えることが大切だと感じました。支援については共通理解の指標をもって、アセスメントすること、そのアセスメントに応じて、チームを組んで支援を考え事前準備すること、また必要に応じて、ネットワークを活用することが大切であると感じました。今後、FDPとその活用について検討し、今回学んだ事前準備のノウハウを活かしていきたいと感じました。

また、支援する際には、自分自身のことも良く知っておく必要があるということを知りました。相手にとって自分がどのような存在として映るのか、どんな存在だったら彼らにとって受け入れやすいのかという視点を学びました。支援の際にはボランティアスタッフの協力の含め、支援者の層の厚さや人材のバリエーションということも大切だと感じました。限られた人材の中で、相手に受け入れやすい存在として、どんな風に支援を実施していくか、工夫していく必要があると感じました。今回の講義では講師の先生の成功・失敗、さまざまな経験から本当にたくさんのアイデアをいただきました。困難と思われる事例に対しても、当事者への配慮やこちら側の工夫によって可能性が広がるということを知りました。

■研修生レポート (10)

問題が複雑化・深刻化した問題に対する対応が求められており、横断的支援プログラムによる訪問支援の必要性が出てきている。その対応事例として具体的支援を佐賀で行われた事例を通して学ぶことができた。

支援の段階には大きく分けて「導入・安定・展開・復帰」の4ステップがあり、様々な実践から関係性を多角的・多面的に捉え、当人に寄り添ったきめの細やかな支援を検討するオーダーメイドのアセスメントを考察する必要性を学んだ。さらに、データにも裏打ちされた結果を見て潜在的なニーズを感じる事ができた。

各ステップでの「NGワード」や利用者との関係性について多くのグループワークを通して学ぶことができた。各ステップで一貫して感じたことは、当人に寄り添い、変化に目ざとくあるべきだということである。さらに、他機関との連携をしっかりと図り、橋渡しをしていくことの大切さも学んだ。

専門性を身に着けるよりも、様々な状況に対応できるチャンネルを多く持つほうが重要であると強く感じる事ができ、励みになった。また、法人設立理念として、横断的な支援を通して、シナジー効果を提供したいという考えに強く共感した。

■研修生レポート (11)

アウトリーチの成功のカギは事前の情報収集が大切である。提供されるだけの情報では操作されていることも想定される。支援をしていく際に考えられるすべてを想定し出来る限り情報を収集する。そして、関係作りの糸口となる趣味趣向を事前に身に付けると谷口氏は何度も話された。また、「家庭教師的アプローチ」については、従来型では、訪問(来所)して来て初めて支援が可能になる。しかし、「家庭教師的アプローチ」は、保護者(家族等)からの依頼から当事者が出向かなくとも支援の対象者となる。画期的であるがその反面、方法を逸脱すると当事者は勿論家族をも傷つけることとなる。家から出ること、社会との関わりを拒む当事者にとって、支援場所に出向く事は大きなハードルとなる。その部分をアウトリーチ(訪問支援)で支援していく。

アウトリーチ(訪問支援)で大切な事に「関係性」がある。ワンダウンポジションから始めるとあった。往々にして親は結果(成果)を性急に出したがる傾向にあると考える。アウトリーチ(訪問支援)の際、当事者の了解を取っておいてもらうという手順は外したくない。しかし親(家族)は拒否(断る)行為に出られては困る…と判断する。当然ながら当事者からすれば、支援者は招かざる客となる。上手く行く関係性であっても「知らされずに突然やってくる」支援者は受け入れがたい存在である。その時、「ワンダウンポジション」から始めるのは当事者と支援者が切れない関係作りになる。映像(再現ドラマ)を交え、『僕の伝え方が悪かった』谷口さんの静かで物腰の柔らかくそして、譲らない姿勢は本当に素晴らしいと感じた。自分自身が支援をしていく上でいつも心に留めているのは「主体は子どもにある。」「自分で選択できる環境を作る」である。「何事にも無理強いしないのが原則である」その通理であると考えた。また、「おっ〜!」と思ったのが、「得易い結果から導き出す希望とやる気」⇒これを得るために基礎からコツコツは駄目!!これは、本当にそうだと思った。適応指導教室では、もと教員である支援員は子どもの学力に関係なく学年に応じた学習を強いている。子どもたちは『分かった』といい、帰る時には先生に悪いから…分かったと言ったと話す。連続性、関連性、発展性をもった学習支援の実例は職場の支援員全員と共有し活かしたいと考える。

■研修生レポート (12)

急激な社会変化の中での、施設に足を運ぶこと自体に困難を抱えている子ども・若者の増加

と自立支援分野には複雑化かつ深刻化する不応問題の実態について、NPO 法人の活動の経過を交えて講義をして頂き、自発的な相談行動の支援を前提としている存在従来型、来所型支援の限界性から、既存の支援体制の限界を補うためのアウトリーチの重要性を改めて痛感しました。

支援を通じて、組織運営を見出された徹底した危機管理の下、関係を重視した支援員（ナナメの関係性）の活用は、利用者にとっては、重要であることに気づかされました。役割分担による世代間の連携も構築しているスタイルは、今後、アウトリーチ支援を実践する上で、今一度、組織体制と組織運営を地域性に合わせながら計画をしていくことの課題に気づくことが出来ました。

また、グループワーク等を通じて各関係機関や社会資源を具体的に人やサービス内容等を把握し利用者のニーズに合わせた連携の必要性和多面的アプローチの視点でチーム支援の体制づくりの重要性を改めて痛感しました。

連携を広げるためにも、事例を通じて把握した機関や資源のみではなく、組織としても他機関等に知ってもらおうアプローチ（協働してもらうための）活動も重要な課題だということに気づきました。

沢山の事例やワークを通じて、問題の複雑化・深刻化を理解することができました。特に、「事前準備」については、しっかりと行うことの重要性を学びました。

学びを通じて、地域性を活用しながら、組織運営や組織体制を見直し既存の支援体制を補うように努めると共に、地域企業の協力等ネットワークをつなぐこと、地域住民の様々な関わりの協力体制ネットワークを結びつけた活動を情報発信しながら、緊急対応的なアウトリーチ活動から、継続的及び包括的な地域で見守るアウトリーチ支援活動へと移行して実践をしていきたいと思えます。

ありがとうございました。

■研修生レポート（13）

現代の日本社会に生きる子ども若者の孤独が危機感を持って伝わってきました。それと共に応えられない支援側の対応が浮かび上がってきます。来談を待つだけでは解決できない複雑で深刻化した課題が広がっているためにアウトリーチが必要だと痛感しました。

事前準備の大切さ、背景を掴むための情報収集とアセスメント、ネットワークの構築とチーム対応、本人の興味・関心を核としてのアプローチの具体的な方法、特にFDPの指標がわかりやすく実践しやすいと感じました。

訪問開始からの導入期・安定期・展開期・終結期と本人の状態に応じて対応も変化し、その具体例も提示されまさに実践のための講義で感動しました。配慮する点の細やかさや具体的なケース別対応方法、特に認知の修正は高度な配慮が必要だと実感しました。

どの時期も本人との関係性と本人の気持ちの尊重が重要だという点が共通していると感じました。また本人以外の家族や周囲への対応も並行して行うことによってそれぞれのストレス軽減が本人のストレス軽減につながっていると思えました。特に終結期はつながりを保ちながらも次のステップにつなげるという点で難しい時期だと感じました。

地域のケースで活用できる技術を見極めてチーム対応の協働に努め、受けた講義を核として実践対応をしていきたいと考えます。

■研修生レポート（14）

環境が極限に困難な場合、本人のみへの支援では限界がある。環境に介入しなければ子ども達の生存を守れない。施設で待つだけでなく、家からひっぱり出すだけでもなく、本人や家族の安全に配慮しながら出口まで伴走する専門性の高いアウトリーチが必要。対象者の困難性と支援者スキルのバランスを考慮した配置システムが不可欠。また単一分野・単一機関の支援には限界がある。

○対象者との信頼構築

支援の入口は子どもや親との信頼構築。その成功率を高める為には、本人に関する徹底した事前情報収集（支援への同意、関心、生活状況、心理状態、家庭環境、支援履歴、NG行為）と多角的分析が必要である。ただし、相手の心情とニーズに配慮し、質問は必要最小限度に留める。相手にとって「どんな存在が一番受け入れられやすいのか」を自問する習慣をつける。また、支援者個人としての関わりの限界を把握し、組織内や他機関のバックアップ体制を整えることも必要である。自己、組織、他機関の分析を怠らないこと。

○支援の見立て

対象者との信頼構築と並行して、見立てを進める。段階を丁寧に踏む支援プランの作成、ストレス要因の軽減方法、他機関活用の準備など。組織内、他機関の協働を進める為には、効率的に共通理解を作ることが大切である。その為、アセスメントは客観的・多角的でシンプルな指標をもとに行う。信頼できる専門家と具体的な対応方針と展望を共有することが役割分担の要である。

○実践

配慮のない支援は対象者に苦痛を与える。本人の権利尊重と苦手意識への配慮は不可欠である。小さな成功体験を確実に積み重ねる為の事前準備を行う。また、提案は実行可能なものにし、約束は必ず守る。本人や家族の認知が歪んでいる場合は、認知行動療法の活用も必要である。万が一失敗した時の想定と、バックアップ体制確保を原則とする。関係機関に誘導する際は本人の不安と抵抗感の解消が第一（関係性が安定するまでは間接的に支援）。支援機関や自身の問題（疾患・障がい）に誤解や偏見がある場合は、その解消も必要。支援の終盤には、援助者の関与が減っても自立を保てるよう、環境の再調整を行う。家族や周りの人を頼れる状態にし、また本人の力によって望ましい状態に変化したことを称賛する。

■研修生レポート（15）

講師の膨大な実践と其中での細やかで柔軟な支援の具体化を学ばせて頂いた。また実践しながら支援に必要なならば自ら新しく作っていくという発想には感銘を受けた。「〇〇があったらもっと出来るのに・・・」ではなく「〇〇がないから作ってしまおう！！」という体制や組織作り、その実行力が出会った当事者の個別の想いを支援として実現しているのだと思った。事業受託によって叶えられる新しい支援の形がまだまだたくさんある事に気づかされたし、それを請け負える実績とやり遂げる責任が事業展開や当事者を支え「アウトリーチによる当事者支援」の公的制度の開拓にも反映されていると感じた。当事者支援から発展し社会事業的要素の強い実践とも感じた。事業所でのボランティアから始まるスタッフ養成と専門職とのコラボのしくみも非常に参考になった。

1 アセスメントと事前準備

困っている行動や当事者の環境の調査が的確なアセスメントに繋がる事。アセスメントの重要性を確認できた。

また、アウトリーチの重要ポイントは「まず会うこと」ではなく「会える設定のヒントをつかむ事」であり支援者が支援の目的を優先する前に、当事者の願いやニーズを掘り起こせる環境作りが大切と感じた。

2 初めて出会う時

初回の出会いは設定にいかにかエネルギーを費やしているのかを知る事が出来た。当事者に負担にならない追い込まない言葉の使い方や場の設定を実践例から具体的に知る事が出来た。引きこもる事、周囲を拒否する事で安定しているかに見える当事者であっても「自分に害を及ぼさない人」は当事者が動き始める窓口になれるという事を学んだ。ひとり一人個別の出会い方、危機的状況の想定、「誰が支援を必要と感じているのか？」などブレない視点が重要と学んだ。

3 1対1の関係作りから小集団への移行とマッチング

1対1の関係作りが進んだ後は、チーム力を使った関係性を広げる支援に移行するポイントを学べた。安心感のある場でこそ当事者の能動性が自然に生まれてくる。チームや他機関連携もその基礎があってこそ有効に機能できる事を確認できた。

4 事例を使ったグループワーク

実際の事例でグループワークをする事で、グループ内のメンバーの立ち位置が様々だったため、その感じ方や受け止め方を発信し合う事自体が非常に勉強になった。

■研修生レポート（16）

SSFの支援の細かい流れから、機関としての構造づくりへの配慮や政治的な枠組みへの働きかけまでとにかく目からウロコの2日間でした。有難うございます。私が一番衝撃を受けたの

は、谷口さんが利用者さん達一人ひとりにかける想いの（まるで身内を思いやるような）温かさと強さ、鋭く保たれた危機感、支援の「分厚い計画性」です。福祉関係の職場で、常に危機感のある状況ばかり対応していると、恐ろしく悲しい事ですが、へんな「慣れ」のようなものが生まれ、危機感と緊張感が慢性化して逆に鈍くなる、という事があると思います。しかし、谷口さんはSSFを立ち上げて相当な年月の間相当な危機に対応してこられているのに、利用者ひとりひとりの苦しみに対して、とても新鮮に鋭い危機感と真っ新たな温かみをもって、ひとりひとりと向き合っておられるところに深い衝撃を覚えました。また、多面的アプローチを使った事例がフローチャートで示されている資料を見た時、本人の支援だけでなく、家族や学校やその他外部にも同時進行で働きかけるという、その支援の「分厚さ」と、導入期・安定期・展開期・終結期の（無駄のない）運びに不可欠であろう、「計画性」と「効率のよい役割分担とチームワーク」に強い衝撃を受けました。このように結果的に支援者に届く支援を行えていることが、支援する側の想いの温かさや強さ、感覚の鋭さの保持にも繋がってくるかもしれません。谷口さんの支援アプローチを学んだ後、自分が思い描いていた支援の厚みの薄さと綿密な戦略の無さに気づき、少し愕然としましたが、私にできる事はパイオニアで成功している人たちに一生懸命に学ぶ他ないと、一から学び直したい気持ちになりました。有難うございます。

■研修生レポート（17）

ひきこもりや不登校状態にある若者に対するアウトリーチについて、その事前準備の重要性を学んだ。相談支援を行ううえで、必要なことは‘ななめの関係性’であり、事前には、本人にとってどんな存在が一番受け入れやすいのかを考えること、本人の価値観を含めたアセスメントを行うことが関係づくりの基礎になると考えられる。そのためには、本人にとって身近な方からの十分な聞き取りを行うことの大切さを改めて感じた。次に、他機関連携について、同じ言語を共有することの重要性を学んだ。様々な機関が同じ対象者の支援に関わる中で、連携の不備によって、不利益が対象者に生じることはあってはならない。しかし、講義の中でいわれていたように、各機関に各々の文化や言語があるため、それを乗り越えられない現状があると私自身も支援を行ううえで感じることもある。文化を共有することは困難であっても、それを理解しようと努めること、そして言語を共有することが大切だと分かった。言語共有の具体的方法として、共通のアセスメント指標を用いたり、アセスメントシートを使用したりすることで、対象者に対する共通理解を深めることを学んだ。最後に、段階的支援を意識して行うことの重要性を学んだ。複数のケースの支援を同時進めていくなかで、各ケースの状況を常に把握しておく必要がある。事前準備期、導入期、展開期、終結期等、支援が現在どの時期にあるのかを意識して支援を行うこと、またケースの状況が最高でも6ヶ月動かなければ、支援方法を見直す必要があることなどは、具体的な把握方法であると感じた。

■研修生レポート（18）

ノウハウが凝縮された非常に濃い内容であった。熱意と行動力あふれる支援に、心が打たれた。講義を通じ、今までの自身の支援を振り返る中での気づきや新たな支援方法を知るといった成果があった。

1つ目の気づきは各支援機関との協働が弱い部分である。現状の若者支援は単なる若者支援では追いつかず、生活支援という包括的なアプローチを要する。当事者を取り巻く環境（特に家庭内）に問題があり、多重に困難を抱える複雑なケースが多い。そこで、各支援機関との連携が必要になってくるのだが、本人や家族の気持ちやニーズに沿っていないと、当事者たちを振り回しかねない。当事者に寄り添いながらも、正確な見立てと連携のタイミングが図れるよう、経験と自己研鑽が必要だと感じた。またスムーズな連携を行うために、日頃から各機関との信頼関係構築が重要であることを再認識した。

2つ目の気づきとして事前準備の甘さも感じた。インテークは丁寧に行っているつもりでも、情報量が不足していると感じた。改めて情報の聞き取りを強化したい。

支援方法はユニークなアイデアが満載であった。本人の興味関心に合わせた学習支援、認知行動療法を取り入れたジョブトレーニングなど、本人が気付かない部分で仕掛けが効果的に施されており、大変勉強になった。

■研修生レポート（19）

アウトリーチに際して、支援者に必要な援助技術論を実践的に学ぶことができた。アウトリ

一は訪問を始める前から始まっている、ということも学んだが、その徹底した事前準備には驚かされた。関係性を築くために、本人の興味関心や NG ワードを把握し、支援者自身も実際に当事者の興味関心の事柄について体験してみる。介入が家族に起こす影響について、チームでアセスメントし、様々な状況を想定して他機関とも最新情報を共有しておく。当事者が次のステップに進む際も、ストレス要因を極力排除するため、丁寧なマッチングや根回しなどを行い、伴走者となる。「支援者は目的を持って意図的に関わる」という姿勢を貫き、実際に実践している話を聞く中で、筆者自身が今まで行なってきた支援は、果たして綿密にアセスメントできていたのか、当事者に心から寄り添っていたのか、意図的に見通しを持って関わっていたのか、など支援者としての姿勢や、支援のあり方、当事者との関わり方について見直す機会となり、筆者自身の対人援助の現場にいる個人的動機についても再認識することができた。スチューデント・サポート・フェイスの取り組みをそのまま自機関に適用することは難しいが、示唆は多く得ることができた。まずは筆者自身の関わるケースをもう一度丁寧に見直し、得た知識と臨床での体験とをすり合わせる作業をしていきたい。具体的には、インテーク面接において、対象かどうかの判断だけでなく、訪問現場を想定しながら、必要な情報を聞いていく。その情報をもとに訪問を行い、もっと必要であった情報が何なのかを覚えておき、他のケースの参考にもする。訪問時の本人の拒否的な態度、発言に左右されず、それも当然の権利として受け止める。批評する専門家としてではなく、一人の関心ある人として関わる。他機関へ誘導する際にも、自発的に行きたいと思えるように、こちらが焦らないようにする。本人が社会と関わる上で一番ストレスがない状況はどういう状況なのかを常に考え、次のステップに進む前に、当事者や次に関わる場所に根回ししておく。自分の長所短所や客観的にどんな人物として見えるかを、友人や他のスタッフから聞き、理解しておく。主に支援者としての資質を磨くことを目的に、以上のことを取り組んでいく。

■ 研修生レポート (20)

「ネットワーク作り」

どのようにネットワークを構築してきたのかについて、解りやすく経験を分かち合ってくれた事が何より勉強になった。

特に「職親」については考えさせられる事が多く、自身の支援上必要な資源であり、従来の福祉的就労にかかる手続き上の隙間で再犯に繋がったケースを思い返した。

様々な専門職が集まった法人を築いた谷口氏を素晴らしいと思いつつ、自身は現段階で他機関へ頼ることでカバーしていると再確認できた。協働と開発という視点で熊本を見ると、可能性と人材があふれている気がした。包括的、重層的支援という観点で見直すと、他機関への連携の上で成り立っている現在に感謝しつつ、積極的に関わって行きたいと思う。

「人材育成」

ネットワークのひとつに、ボランティアというカテゴリを作り、負担少なく入れ込むことで集まりやすく構成する方法。そこから支援員を引き抜く方法はとても有効だと思った。

事業形態上、ボラを募る事は困難が伴ってしまうが、「負担減」というのがキーポイントとして印象深く残っている。

「導入期～安定期～展開期～終結期」

関係性の変遷について、オーダーメイド型支援の中でも、このようなガイドラインを支援に当てはめるだけで、現場で苦悩してきた「対象者との依存関係」の解決に繋がる事を学んだ。

支援対象者は、幼少期のアタッチメント形成や生育環境に問題を抱えており、信頼関係を築く事を渴望しているケースが多い。

そのため求められ続けるが、依存関係に陥りやすく、継続した支援を実施することが支援者側の負担になる。

ピアという立場からアプローチする際の問題点であり、対人援助に携わる上での私自身のテーマでもあったので、非常に役立つ講義だった。

今後へ活かし、チーム内で分散し点で支える事の共通認識にこの関係性の変遷を利用したいと思う。

「スケール」

私に関る他機関も、分野別にそれぞれのスケールをお持ちだが、今回は法人で作成したスケールを共有する事を実施されていることに驚いた。

しかし、自身の施設利用者であるならば、そのスケールは更生保護対象者の特徴や、再犯の前兆などを熟知したこちらが作成する事、他機関のスケールと同等に扱ってもらう事を躊躇う必要はないと思直した。

「保護者対応」

支援のヒントが詰まった保護者の方々だが、問題を抱えた方々青少年少女の支援に関る際、避けては通れない。

「まとめ」

谷口氏の講義は、全体的に実践に活かせる物ばかりだった。
全く書ききれていないが、本当に多くの事を学び感じる事ができた。
前日の講義で概要を学び、現場のニーズと開発、構築のノウハウを学んだ。
研修慣れしてきた、自分や他の受講者も引き込む内容に感動した。
現場の音声を流され、対象者の叫びを聞き、俄然やる気がみなぎった。

講義・演習④「教育機関におけるアウトリーチとその実践」

■研修生レポート（1）

スクールソーシャルワーク (SSW) とは

①福祉的な視点を持ちながら、学校・子ども・家庭に対して支援や活動

- ・個人と環境に注目し、子どもの不安や悩みについての支援
- ・子ども自身が環境とうまく折り合うことができる力を身につけることへの支援
- ・環境に働きかけ、子どもが安心できるように環境調整を行う

「つなぐ」「出かける」「環境に働きかける」仕事とも表現される。

(不登校生の調査では、子どもの人数は減少しているが、不登校児の人数は例年横ばいで推移している。)

②スクールソーシャルワーカー活用事業

- ・関係期間とのネットワーク構築、連携・調整
- ・学校内におけるチーム体制の構築、支援
- ・保護者、職員等に対する支援・相談・情報提供
- ・教職員等への研修

(SSWr だけで行うのではなく、関係期間・支援者と共に行う)

<SSWr の役割>

- ・アウトリーチ
- ・関係機関へつなぐ活動
- ・直接的・間接的な支援活動
- ・チームでのアセスメントによる支援方針検討

(学校訪問、家庭訪問、機関訪問、面談、同行支援、学習支援、ボランティア育成・支援活用)

ボランティア募集：活動説明会→ボランティア登録

既に保持している資格によって、適応教室や学校内での支援等にも関わる。

基本的には、まず学校内関係者(管理職・教員・スクールカウンセラー・心のふれあい相談員)間で協力体制が整った後に、学校の管理職から学校教育支援センターに連絡が入る。

↓
学校教育支援センターSSWr が学校を訪問し、相談内容を聞き取る

↓
支援センター内会議

↓
支援センター・学校職員・保護者との面談：支援内容を検討する
(同意が得られれば、他関係機関と連携する)

〈アセスメントに向けた情報収集〉

- ・ 生育歴(心身の状態、性格、雰囲気、体格)
- ・ 家族構成、家庭環境、療育方針
- ・ 学校生活(学力、生活状況・様子、友だち関係、係り・委員会・部活動の様子)
- ・ 学習：集中力、得意・不得意、読み書きの状況、表現力、こだわり
- ・ 対人関係：同級生・他学年・同性・異性との関わり、嫌がること、楽しんでやっていること、コミュニケーションパターン
- ・ 放課後、休日の過ごし方、趣味：特技、上手なこと、習い事、普段の遊び

〈集めた情報からの当事者の見立て〉

- ・ どんな子どもかを想像する
- ・ 支援方針を決める(短・中・長期):本人・保護者・支援者の考え、将来像
- ・ 方策(プラン・支援体制・役割分担):誰が、いつ、どんなことをするのか(伴走型の支援を目指す、時として異動があるため、一人で抱え込まないこと)

〈見立ての修正〉

- ・ 改善・停滞・悪化:実際の支援を開始し、段階に応じて見立てていたことを再検討する。(半年以上変化が見られない場合は、プランを変える)
- ・ 振り返り:家族・関係機関との当事者の状況共有、上手くいったこと・新たな課題、ビジョン(おそらくこれは、フィードバックのことを指す)
- ・ つながる支援(テイクオーバー):関係機関・担当者によって、当事者を見ている期間が違う。つながることで、一支援者が見ていない当事者の様子を知ることができる

〈事例を基に、アクションプランを策定するグループ討議〉

指標シート項目

- ・ 児童の現状：本人の現状、家庭の現状、学校での様子
- ・ 当事者にどうなってほしいか
- ・ 一人の支援者として、まずどんな直接的な関わりをするか
- ・ 団体としてのどうするか:役割、自前の資源でできる支援は何か
- ・ どんな機関とつながるか

→時間の関係上、完成までには至らなかったが、「どのようになることが当事者にとってよいだろうか」という講師に問いかけに「まず、当事者が安心して過ごすことができる居場所を作ること」が目標で一致した。

そのために必要なことをと、足りない情報を集めた。これまでの研修と、様々な機関から集まった研修生であるため、色んな角度から見た必要な情報についての意見が出され、集められ、多くの情報が集まった。

全ての講師が言うように、事前準備・他機関とのつながりが、当事者を良い状態へと変えるキーになっていることがよく分かった。

また、実地研修を受けた上で、若者サポートステーションを訪問し、どのような若者が支援を求めているのか、また中高生年代の若者の内、学校復帰を考えている人たちが望む場はどんなところか伺いたいと思います。そうしながら当事者のニーズを知り、本校にも取り入れていける事柄であれば取り入れる等、本校としてできるサポート(例えば、本校が、学校復帰を目指す当事者の学校復帰の場になる等)の在り方を考えたいと思います。

■研修生レポート(2)

支援活動の展開においては、地域や自分が所属している機関の特性の把握がなされていることが必要であると再確認した。

また、支援期間(6か月や9か月)についてのお話があったが、所属においてもモニタリングや支援効果の検証の機会をどのタイミングで持っていくかを見直ししていたところであり(現在は3か月、6か月、12か月…)、対象者像や機関として求められる役割が異なるため一律に比較はできないが、一つの目安として参考になると感じた。

グループワークにおいては、支援に当たり支援者間で共有すべき情報について、事例に即して検討することができたため、具体的にイメージすることができたと思う。

■研修生レポート（3）

実際のケースでは、十分な情報を得る前から支援を開始する場合も多いが、その中でもどの情報が足りないか、何を把握しておく必要があるかを意識しておくことが大切と思われる。見立てた上で支援を行っていくが、停滞・悪化する場合もあるため、見立ても支援方針も再検討を行い、柔軟に対応していくことが必要。また、対応する人間が複数の場合には、支援者同士で対応内容や本人の様子などを、できる限り共有しておくことで、支援者同士の方針のずれを防ぐことができる。

■研修生レポート（4）

本講義では、以前アウトリーチ研修に参加された経験もあり、現在練馬区でスクールソーシャルワーカーをされている先生のご経験を追体験する講義であった。私個人としては、スクールソーシャルワーカーがような役割を担うのか知る機会になったと考える。

特に、アセスメント、支援計画の変更・修正に関する部分が興味深かった。機関として約半年間、当事者に変化がなければ修正を必要とするといった時間的な目安を知ることができたのは大きい。自身・次団体の支援が現在どの段階にあるのか、適切な他団体との連携、仕切り直しなどの「テイクオーバー」を行えるシステムが必要であるといえる。

その上で、講義だけでなく、グループワークを通して、どのような事前準備・情報収集を行うのかを受講生同士で一緒に考える機会を得られたことが印象深かった。

■研修生レポート（5）

アウトリーチを用いた介入について、事例を通したグループワークで学ばせて頂きました。多職種の方とのグループワークであったため、つなぐ関係機関や本人への対応など様々な角度からの視点を学ぶことができました。実際の事例を通して対応を考えることで、具体的な対応について知ることができました。

■研修生レポート（6）

教育機関におけるアウトリーチとその実践、ということで児童生徒に係る具体的事例を交えての講義でした。

その子に合った情報をいれることで良い結果につながる手法のひとつであると感じた。支援計画を考えた際は、どの機関とつながることでより良い支援になるか、現状足りない情報がどういったものか等、ワークシートを使い意見交換できた。現場で活躍されている方々が考える違う視点から、その子に必要な支援がどういったものがあるか挙げ、聞くことで、よい刺激になった。

■研修生レポート（7）

スクールソーシャルワーカーの方々の役割を細かく知ることができ大変参考になりました。こちらの地域では実際問題としてスクールソーシャルワーカーの役割は学校長の考えにより対応の違いが生じてきます。スクールソーシャルワーカー独自の判断では決定できないことが多いのではないのでしょうか。全国ではいかがでしょうか。

■研修生レポート（8）

スクールソーシャルワーカー（SSW）は、福祉的な視点を持ちながら、学校、子ども、家庭に対して行う支援・活動のこと。個人と環境に注目し、子どもの不安や悩みについての支援（エンパワメント）を行う。子ども自身が環境とうまく折り合うことができる力を持つことができる支援を行う。環境に働きかけ、子どもが安心できるように環境調整を行う。「つなぐ仕事」「出かける仕事」「環境に働きかける仕事」とも表現される。

スクールソーシャルワーカー（SSWr）の役割は

- アウトリーチ活動
- 関係機関へつなぐ活動
- 直接的・間接的セサメントによる支援方針検討
アセスメントでは、以下の留意点あり
- 情報収集（成育歴、家族・家庭、学校生活、学習、対人関係、放課後や休日・余暇・趣味など）
- 見立て
（その子はどんな子か、支援方針・支援目標、方策【アクションプラン】【支援体制】【役割分担】）
- 見立ての修正、変更
（改善 or 停滞 or 悪化、振り返り【フィードバック】、つなぐ・つながる支援【テイクオーバー：引継ぎ】）

■研修生レポート（9）

個人や一つの組織の持っている力だけでは、支援が難しいケースが多いということを改めて感じました。個人や一つの組織の対応では表面的な問題の解決のみに留まり、背景の問題を大きく抱えたまま、傷つき体験を重ねているケースも多いと感じました。しっかりとした情報収集をした上で、それぞれの機関の力やアイデアを合わせて、当事者を支えていくことが必要だと学びました。

グループワークを通して、それぞれの視点から様々なアイデアが出ました。自分たちだけでは、多種多様な資源の全て網羅することは難しいので、それぞれが協力しあって、アイデアを出す場を設けることが大切だと感じました。

■研修生レポート（10）

スクールソーシャルワーカーについて考察することができた。1つの事例をチームでシェアし、動くことでより多角的な支援ができると共に、人間関係を広げやすいきっかけになるということに気づかされた。この点について、アセスメントのための情報収集をチームで行なうことでより多くの事柄を知ることができることをグループワークから学んだ。また、グローバル化していく社会にあわせて、支援の体制についても変化させていく必要を感じたので、今後の課題としていきたい。

■研修生レポート（11）

教育機関において、支援の必要な子どもに対して、いかに地域の方々との協働が大切であるか、2つの事例検討を通じて学べた。

学校は、校内で起きている事案を出来るだけ教職員の中で解決しようと努力が窺える。しかし一人の子どもを支援するには、公的機関、民間機関、地域ありとあらゆる社会資源の中から適正に使い支援していく必要がある。一機関の抱え込みは本来の支援から歪んだものへとなる可能性が有る。それぞれの立場から協働していく事が大切である。

■研修生レポート（12）

スクールソーシャルワーク事例を通して講義して頂きとても理解が深まりました。環境に働きかけ、子どもが安心できるように環境調整を行う「つなぐ仕事」「出かける仕事」「環境に働きかける仕事」と表現される通りに、グループワークでは、関係者による共通理解の重要な点（チーム支援）や役割分担でのアウトリーチ支援活動を担う点での地域との関わりや地域資源の活用等多面的に環境調整を行える視点に、連携先をしっかりと把握することの大切さにも気づかされました。また、つなぐ・つながる支援（引継ぎ）について、移行する際に、支援が重なる時間が必要であることや半年間変化なければ方針を変える見立ての修正、変更など協働する上では、とても重要だと実感し他機関連携での環境に働きかける支援の大切さは、地域ネットワークの構築で実践したいと思います。

ありがとうございました。

■研修生レポート（13）

アセスメントのための情報収集ではNGワードの把握など尋問のようにならずに相手が出した話を広げる形で話を聞くこと、非行に関しては本人の自尊心を傷つけないように経過を聞

くことが留意点であると学びました。

見立てではどんな子どもで、何をを目指すのか、誰がいつどのように支援するか具体的な役割分担が大切であると学びました。見立ての修正・変更も適宜行い本人の気持ちに共感し共に振り返ることで信頼関係が保持され、ケースの進展につながると思いました。

引き継ぎ時は支援側の両者が重なる支援時期を設け、見捨てられ感を防ぐ等、具体的な対応の配慮が実践に参考になりました。

■研修生レポート（14）

スクールカウンセラーが子どもの内面に向き合うのに対し、スクールソーシャルワーカーは子どもが安心できるように環境調整を行う（必ずしもどちらかではない）。見立ての偏りを防ぐ為に、方針決定はチームで行うことが大切であり、引き継ぎも容易となる。グループワークでは、見立てに必要な詳細情報の収集を行った。

■研修生レポート（15）

1 スクールソーシャルワークとスクールソーシャルワーカーの役割と川村先生の行っているケースワークの実際を学ぶ事ができた。特に「チームに関わる」という体制が支援の安定性を保っているものと認識できた。

2 アセスメントにおける質問力（支援者の視点からの情報収集）の重要性とポイントを再確認できた。また、ジェノグラムから何を受け取るか？や、本人のニーズに合わせた支援計画の具体化について関係機関との連携やチーム力の活用は重要であり更には様々な機関の役割や「その中に実際にいる人」との関係作り、また地域のインフォーマルなものも含めて連携できる資源（人・場ともに）の把握がポイントと感じた。

* 講義自体の柔軟な進め方や GW でのパワポの有効な使い方についても大変参考になる講義でした。

■研修生レポート（16）

学校という場は、学校内外で苦しみや悩みを抱えている子供達を発見して歩み寄るには最も適した場かと思うのですが、（特に複雑な家庭環境や発達状況にある場合は）やはりそこから支援を広げ深めていくのに、学校と効率よく連携できるよう学校外の機関が柔軟に構造を組み直してゆくことが不可欠なのではないかと感じました。また、苦しんでいる子供を取り巻いて支援しようとする大人達が、人や機関によって、臨床心理士（医学）的視点をもっていたり、ソーシャルワーク的視点をもっていたり、学校での教育を最優先にしようとしたり、家庭での調和を最優先にしたりと、そのようなアプローチの多様性はもちろんよい事でもあると思うのですが、的確なコーディネート無しでは、各機関の努力や思惑が噛み合わず、被支援者やその家族にとっても各支援機関にとっても、混乱やストレスを招く事になりかねないと感じました。地域における学校と学校外の機関の連携の効率化の必要性について考えさせられました。

■研修生レポート（17）

スクールソーシャルワーカーのアウトリーチ実践の現状を学ぶことができた。スクールソーシャルワーカーは、再度学校に来れるように子どもにとって最善の環境を整えることや、進路決定の際、本人、先生、両親の後方支援を行っていることが分かった。事例検討を行った際、家族支援等スクールソーシャルワーカーがすべて行っている現状を知り、自分自身の所属機関で連携が可能であると感じることも多かった。スクールソーシャルワーカーの方に、医療福祉等他領域の機関を活用するためにも、それぞれの機関がその機能を周知していくことも課題の一つであることが分かった。

■研修生レポート（18）

現在カウンセラーとして相談業務を行う中で、ソーシャルワークの視点は非常に新鮮だった。悩みや問題があると、カウンセリングでは個人の内面に重きを置くが、ソーシャルワーク

では個人と環境の不適合という広い視点で考える。そして、ソーシャルワークでは、個人と直接関わる支援者だけではなく、関係者・機関等、社会がどのように関わり支援を行えば問題解決に向かうか、綿密なプランを立てていく。実際にその流れをグループワークで体験することが出来たので大変勉強になった。

今後はカウンセリングにソーシャルワークの考え方も取り入れ、全体を俯瞰した、より広い視点で支援活動が出来ればと考える。

■研修生レポート (19)

ソーシャルワークが、実際に教育現場においてどのように生かされているのかを、生きた知識として具体的に学ぶことができた。子どもの内面だけでなく、本人と間接的な関係であるリソースに対しても同時に、かつ積極的にアプローチする視点は、当事者への直接的な支援にばかり目がいていた筆者にとって、とても新鮮であった。環境調整を行なっていくためには、ケース全体をマネジメントする能力が必要であり、日常的に社会資源に精通し、他機関と顔の見える関係性の中で連携していきたいと感じた。「誰が」「いつ」「どこで」「どのように」「どんなことを」するのか。ゴール目標に向けて、役割を丁寧にアセスメントの中で明確にし、本人、家族、チーム、関係機関と共有していくことが、当事者への間接的な支援として非常に効果的であることを理解することができた。具体的な今後の取組としては、他機関主催の研修や講演会などに積極的に出向き、関係を築くために、声をかけてみる、当事者の誘導先として適切な機関か迷った時は、そこに電話をして尋ねてみるなど、フットワークを軽くする取り組みをする。

■研修生レポート (20)

「環境調整」

面接時に見えている、一面的な視点でのアセスメントではなく多面的な環境調整を視野に関する事の重要性を学んだ。

また、川村氏の中にある、専門性への自信が感じられたのだが、そこに裏打ちされた縦割りの学校や行政との関り方のヒントを貰った。

家庭外の機関も、対象者にとって環境であることを再確認した。

「アセスメントと見立て」

川村氏が「6ヶ月で改善がみられない場合はプランを変更する」という話をされ、自身の支援体制での時期について、再考察する必要性を感じた。

一般的な支援計画では更生保は護は稼動できないのだが、では試行錯誤しながら作ってっみてはどうかと感じた。

「国籍について」

私自身も何件か関わってきたケースで、文化や養育方法、言葉の違いについて触れられた。

支援提供しにくいのではなく、受けにくくなっているのなら、そうすればいいのかについて現在も考えている。

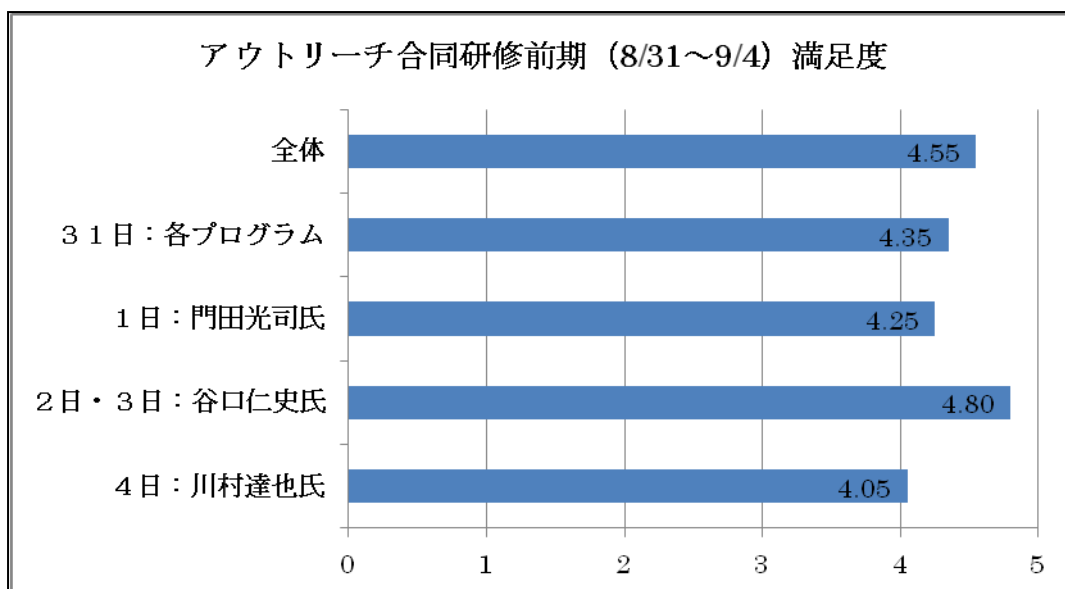
「まとめ」

罪を犯し逮捕される事、再犯防止は罰や隔離では完全しない。その方の問題が収束するのではなく、そこに至った経過と心に耳を傾けたいと思った。閉じている心へも繰り返し寄り添うことで動き始める事を信じたいと思った。

少年時代の介入がどれほど大切な事なのかを改めて考えさせられる内容だった。

合同研修前期の満足度についてのアンケート結果は図表 6 の通りであった。

図表 6 (合同研修前期／アンケート結果)



(合同研修前期における各プログラムの満足度を研修生が5段階評価(1が最も低く、5が最も高い)で回答したものの平均値を掲載している)